東日本の経塚の地域性

The Regional Characteristics of the Sutra Mounds of Eastern Japan

村木二郎

はじめに
❶ 経筒の分類
❷ 外容器の分類
❸ 埋納法の分類
❹ 東日本の経塚の地域区分とその傾向

[論文要旨]

12～13世紀に，経塚は全国各地で造営された。特に，平安京を中心とした近畿と，大宰府を中心とした九州北部が2大中心地であったため，これまでの研究も西日本の経塚が対象となることが多かった。しかし，ここ数年東日本の経塚調査例も増えてきている。そこで本稿では東日本の経塚のなかで，銅製経筒や土製・石製の専用経筒・外容器を出土した経塚を対象に，地域的な傾向をみていく。経塚は地域色の強い遺跡であるため，個々の資料を詳しく検討する際にはどうしても特殊性が目立ってしまう。そのため本稿では巨視的な立場で東日本の経塚を概観することにより，今後の研究における基礎作業をおこなうことが狙いである。

手法として，まず銅製経筒を近畿系の経筒と，製作技法の異なる一鋳式経筒に分類し，その分布地域を押さえる。次に，外容器を珠洲系，東海系，石製などに分け，これらの分布圏も同様にみていく。また，経筒を埋納するにあたって外容器を用いる場合や石室を造る場合がある。出土状況が明らかな例が増えてきたため，こういった情報をもとに埋納法にもとづいた分類も加えた。これらの作業により，日本海側と太平洋側の違い，関東の独自性などが明確に現われる。それらをもとに，東日本の経塚は，陸奥，出羽，関東，中部高地・静岡東部，東海西部，加越，嶺南の7地域に区分することができた。

はじめに

古代から中世へと時代が移り変わる中で，浄土教が広く流布していった。現世での望みを捨て来世への憧れを示す厭離穢土，欣求浄土の声は高く，極楽往生を遂げるために功徳を積まねばと，さまざまな作善業がおこなわれた。造寺，造仏，写経が頻繁におこなわれたのはそういった風潮によるが，各地に盛んに造られた経塚も，同様の性格をもつと考えられる。すなわち，写経するだけでも功徳があるところ，法滅を避けるためにそれを地下に埋納し，修行中の弥勒菩薩が如来となって56億7千万年後に下生するまで伝えるという理論的背景をもつ経塚の造営は，より上位の作善業と位置付けられよう。藤原道長によって寛弘4年（1007）にはじめられた経塚の造営は，12～13世紀にかけて，全国各地でみられるまでの流行的作善業となったのである。

経塚は平安京を中心とした近畿と，大宰府を中心とした九州北部地域とに2大集中地をなす。そのため，研究史の上でも西日本の経塚が検討対象となることが多かった。
東日本の経塚研究は，個別事例の検討や各県単位の集成研究がほとんどである。その中で，和歌山県の那智経塚遺物に信濃と美濃の願主銘の経筒があることを手がかりに，一鋳式の経筒について考証した杉山洋氏の論考は注目される[杉山1983]。また，全国的に経筒外容器に転用した壷・甕類を集成し，当時の陶器生産，流通を明らかにした吉岡康暢氏の研究の中で，東日本の経筒外容器が日本海側と太平洋側で大きく異なることが指摘されている[吉岡1985]。集成研究は関秀夫氏の全国の集成[関1984]以外に，岩手[岩手県立博物館2000]，宮城[藤沼1975]，福島[三宅1970]，秋田[奈良1957][伊藤2002]，山形[川崎1991][川崎2002][伊藤2002]，群馬[唐澤1998]，栃木[皆川2001]，埼玉[野沢1999]，千葉[木村1995]，神奈川[冨永2002]，長野[森嶋1981]，新潟[松谷1958][伊藤1998]，福井[村上2002]各県でおこなわれており，資料は充実してきている。

これらの成果を踏まえつつ，ここ数年で増加した発掘調査例を加味して，本稿では近畿以東の経塚を広く扱うことにする。広大な範囲であるため，仮に東北，関東，中部，北陸に分けながら話を進めていき，最終的に経塚からみた地域区分を設定したい。対象とする経塚は11～13世紀の関秀夫氏のいう「埋経の経塚」に限ることとする[関1990][(1)]。方法としては，まず銅製経筒の分類をおこなう。これは近畿や九州のように一定の地域に高い密度で分布しているものではないため，型式として設定するには至らないが，近畿の経筒との比較を通して数種類に分類は可能である。次に外容器の分布状況をみる。外容器として使用される陶器の産地を控えていることから，その流通圏に沿って明らかな区分ができる。最後に埋納法を検討する。しかしこれは出土状況の明らかな例が地域によって偏りをみせているため，未だ資料的な限界を感じざるをえない。これら3者の特徴から東日本の経塚地域区分をおこない，今後検討していくにあたっての基礎作業としたい。

なお陶磁器だけが出土する経塚については，墓地や他の信仰遺跡などである可能性も否めなく不確定要素が多い。そのため本稿で扱う資料は，経塚特有の銅，鉄製経筒，あるいは竹，木製経筒や，陶製や石製の専用経容器[(2)]が出土している遺構，遺跡に限ることとする。本稿末尾のリストを参照されたい[(3)]。

❶……経筒の分類

経筒には銅製（銅鋳製，銅板製），鉄製，竹製，木製，陶製，石製などがある。しかし竹製，木製はわずかであり，鉄製も東日本ではほとんどみられない。陶製，石製については外容器との区別が困難なものが多いため，これらは外容器の項で扱うこととし，この章では銅鋳製，銅板製経筒について考察する。

1　銅鋳製経筒

a．近畿でみられる経筒

東日本の経筒には近畿の経筒を模倣したもの，あるいは直接もち込んだ可能性を想定できるものがある。これらを近畿系経筒と呼び，近畿の経筒型式に基づいて分類する。近畿の銅鋳製経筒は，蓋の形態によって，笠状の作り出しをもつ笠蓋式と，もたない盛蓋式に分かれる。またそれぞれ天井部に甲盛をもつので，その段数によって，一段笠蓋式，二段笠蓋式，三段笠蓋式，一段盛蓋式，二段盛蓋式，三段盛蓋式とし，筒身の口径からさらに細分できる［村木1998b］。ただし，本稿で扱う東日本の経筒は近畿の経筒と類似するものはあるが，細分した近畿の型式がそのまま当てはまるわけではない。そこで，ここでは一段盛蓋式など，蓋の段数までの形態分類でみていくことにする。また近畿の経筒型式のひとつとして平蓋式を立てたが，これは単純な形態であるため必ずしも近畿固有の型式とは思われない。近畿系経筒とは区別して，これもこの項で扱っておく。

近畿系経筒（30点）[4]

陸奥１・毘沙門山〈二段盛蓋式〉，陸奥３・金鶏山〈二段盛蓋式〉，出羽７・松岡〈一段盛蓋式（２点）〉，出羽16・河島山Ａ〈二段盛蓋式〉，出羽19・東根大森山Ｂ〈二段盛蓋式（２点）〉，出羽21・山形大森山山頂〈一段盛蓋式〉，出羽30・笠松山１号〈二段盛蓋式〉，伊豆１・伊豆山神社〈一段盛蓋式〉，駿河２・香貫山〈二段盛蓋式〉，遠江４・小国神社〈二段盛蓋式〉，遠江５・石室寺〈一段笠蓋式〉，遠江６・塔之壇〈一段盛蓋式（７点）〉，尾張１・大御堂寺〈一段盛蓋式〉，信濃８・旧海岸寺奥の院〈二段盛蓋式〉，越後５・青海神社〈二段盛蓋式（２点）〉，越後13・関山神社〈一段盛蓋式〉，越前５・谷口〈一段盛蓋式（２点）〉，若狭１・丸山〈一段盛蓋式〉，若狭２・田烏元山谷１－２号〈一段盛蓋式〉，同４号〈一段盛蓋式〉

これらは近畿の経筒と全く同じといえるものから，形態は模倣しているが筒身の厚さが近畿のものより分厚く在地の技術で作られたと考えられるものまで含んでいる。一段盛蓋式，二段盛蓋式がほとんどで，笠蓋式は石室寺経筒しかみられない。笠蓋式は近畿では京周辺や播州地域に分布するが，伊勢や日本海側には広がらなかった点は示唆的である。

地域別にみると，東北９点，関東０点，中部13点（内７点は塔之壇経塚），北陸８点である。関東に１点もみられないことは注目すべきである。中部，北陸例が西寄りに集中していることは，やはり近畿に近いがゆえの事情である。その点，東北で９点もの近畿系銅鋳製経筒が出ており，大半は出羽出土というのは，この地の京文化への志向性を読み取ることができよう。

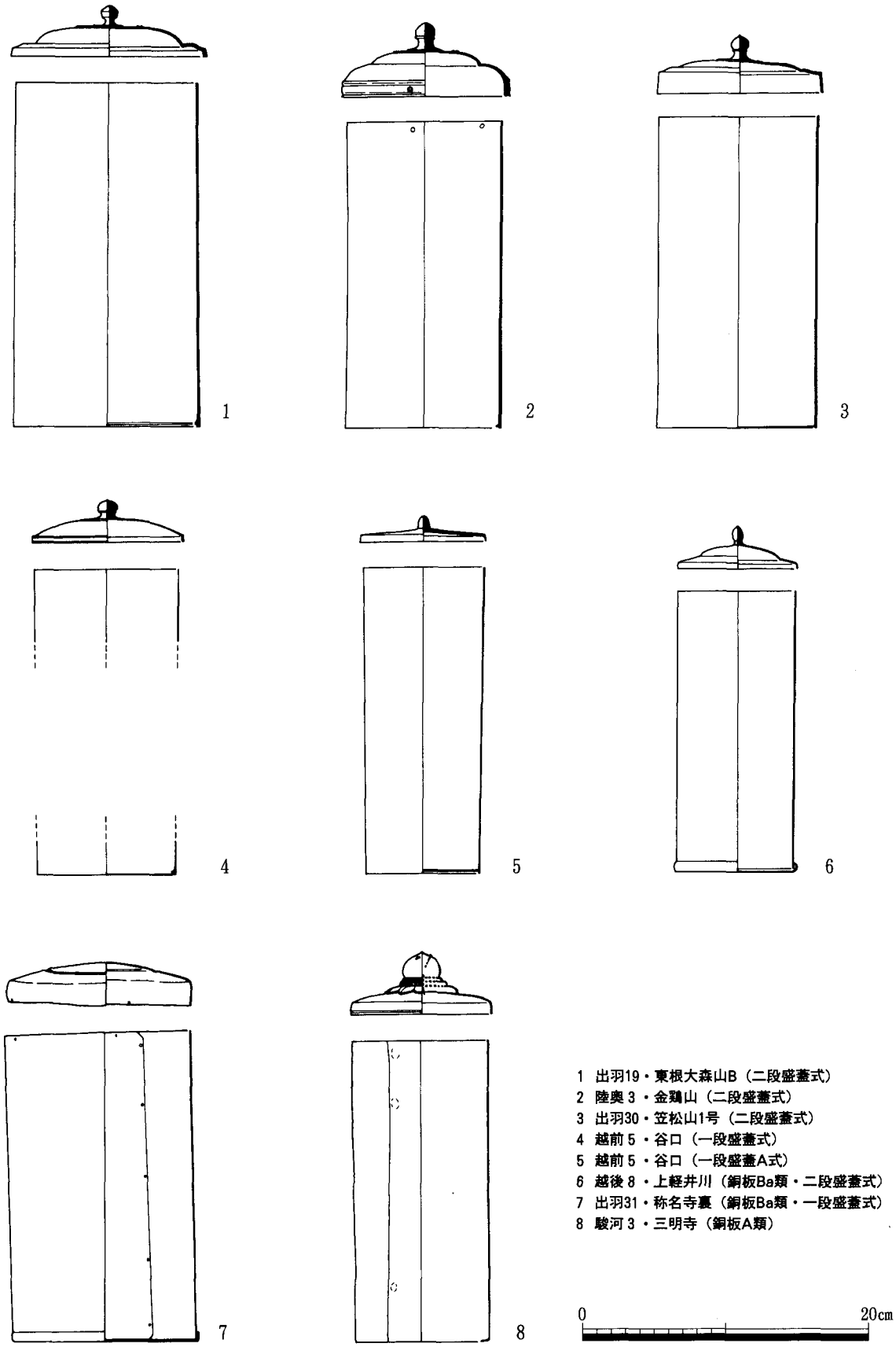

1
2
3
4
5
6
7
8
1 出羽19・東根大森山B（二段盛蓋式）
2 陸奥3・金鶏山（二段盛蓋式）
3 出羽30・笠松山1号（二段盛蓋式）
4 越前5・谷口（一段盛蓋式）
5 越前5・谷口（一段盛蓋A式）
6 越後8・上経井川（銅板Ba類・二段盛蓋式）
7 出羽31・称名寺裏（銅板Ba類・一段盛蓋式）
8 駿河3・三明寺（銅板A類）
0
20cm

図1　近畿系経筒

ところで，一段盛蓋式の中で口径が8㎝前後の最も小さなタイプを近畿では一段盛蓋A式とし，三丹地域（丹後，丹波，但馬）に特徴的な型式であると指摘した[村木1998b]。これが越前の谷口や若狭の丸山，田烏元山谷でもみられる。これらの経塚は，三丹の経塚が次第に周辺地域に拡大していき，若狭から越前南部にまで達したものと考えられる。ちなみに三丹の経塚は12世紀末から13世紀にかけて周辺に広がっていくので，これらの時期もそのころと推定できよう。

平蓋式経筒（18点）

陸奥4・田束山5号，陸奥22・熊野神社，出羽3・閑居長根2号，出羽11・大山，出羽19・東根大森山B，出羽24・滝，出羽28・仁田の沢，出羽33・烏帽子山，常陸2・門毛，常陸4・雷電山古墳，常陸6・鹿島神宮寺，伊豆1・伊豆山神社，駿河2・香貫山，三河2・普門寺1号，号不明，甲斐2・柏尾山2号，越後4・菖蒲塚，越前4・金ヶ崎

平蓋式経筒は蓋に盛り上がりをもたないタイプで，鈕の有無は関係ない。東北8点，関東3点，中部5点，北陸2点と，各地でみられるが，東北の多さはここでも目立つ。平蓋式の中で，鏡を蓋に転用しているものが，閑居長根2号，大山，仁田の沢，烏帽子山でみられるが，すべて出羽の経筒である。特に閑居長根2号経筒は，鏡面に宝珠形の鈕を作りつけており，単にありあわせの鏡を蓋代わりにのせたわけではないことがわかる。九州でしばしばみかけるように，鏡を経筒の底板に転用しているケースがある。これは近畿ではほとんどみられない，九州に特徴的な傾向であるが[木村2003]，東日本でもこういった例は若干みられる。しかし蓋に用いる例はほかには次に述べる一鋳式の経筒に1例ある程度で極めてまれであり(5)，出羽の経塚を考える際のひとつの特徴といえよう。

b．東日本独自の経筒

近畿や九州の銅鋳製経筒は筒身部に別作りの底板を嵌め込む入底式がほとんどで，先に挙げた近畿系経筒，平蓋式経筒もすべてそうである。これに対し，筒身部と底部を別作りにせず一度に鋳造してしまう一鋳式経筒がある。近畿の経筒の中では播州の経筒である三段笠蓋式にみられるほかはわずかで[森内1992]，中国，四国に若干数確認できる程度である。九州でもほとんどない。この一鋳式経筒が東日本ではかなり多くみうけられる。以下，蓋の形態も加味してみていくことにする。〈　〉内は蓋の形態である。

一鋳式経筒（36点）

陸奥3・伝金鶏山〈平蓋〉，陸奥8・鶉崎〈一段盛蓋〉，陸奥10・松野千光寺〈一段盛蓋〉，同SK02〈特殊〉，陸奥17・霊山寺〈平蓋〉，陸奥20・米山寺3号〈不明〉，陸奥24・上ノ原〈一段盛蓋〉，出羽32・別所山〈特殊〉，出羽35・元和田〈一段笠蓋〉，常陸2・門毛〈平蓋〉，常陸3・東城寺3号〈不明〉，下野2・小野寺〈一段笠蓋〉，上野1・別所〈平蓋（2点）〉，武蔵1・妻沼1号〈平蓋〉，同3号〈特殊〉，武蔵2・平沢寺〈不明〉，武蔵3・利仁神社〈一段盛蓋〉，武蔵5・大山〈不明〉，武蔵6・薬師堂山〈鏡転用平蓋〉，武蔵13・白山神社〈平蓋（2点），二段盛蓋〉，相模2・衣笠城〈平蓋〉，伊豆1・伊豆山神社〈一段盛蓋〉，駿河5・千鳥道〈平蓋（2点）〉，甲斐1・雲峰寺〈平蓋〉，甲斐6・秋山〈平蓋〉，信濃5・経ヶ峯〈不明〉，信濃7・北日名〈平蓋〉，信濃11・下牧2号〈平蓋〉，美濃1・飯高〈一段盛蓋〉，越後2・大沢〈一段盛蓋〉，加賀2・長滝墓山C〈平蓋〉，加賀3・別山〈不明〉

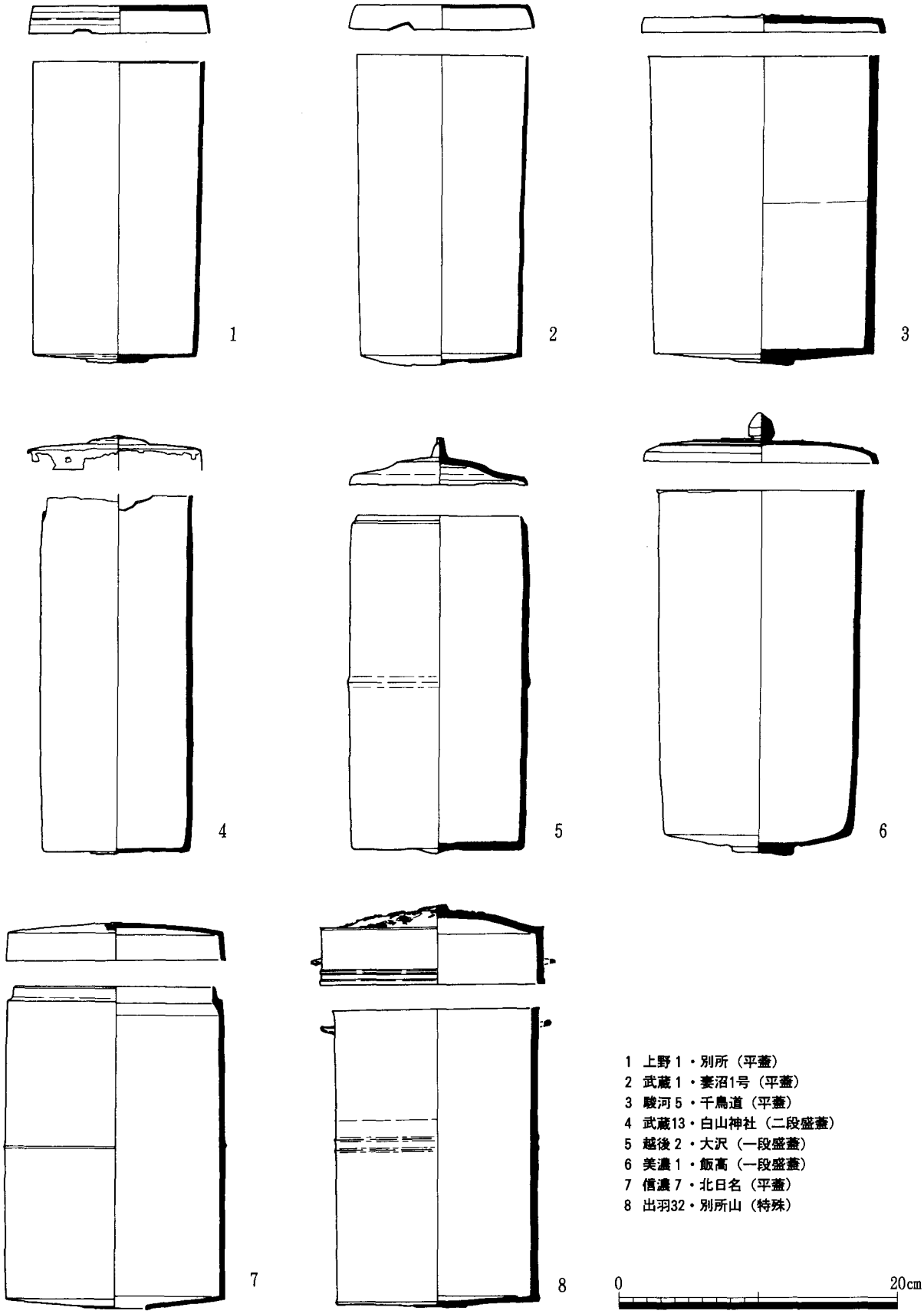

1
2
3
4
5
6
7
8
1 上野1・別所（平蓋）
2 武蔵1・妻沼1号（平蓋）
3 駿河5・千鳥道（平蓋）
4 武蔵13・白山神社（二段盛蓋）
5 越後2・大沢（一段盛蓋）
6 美濃1・飯高（一段盛蓋）
7 信濃7・北日名（平蓋）
8 出羽32・別所山（特殊）
0
20cm

図2　一鋳式経筒

一鋳式は器壁も厚く，非常に重厚な経筒である。いずれも底部中央に湯口をもつもので，鋳造技法を同じくする。しかし，作風は丁寧なものから粗末なものまでさまざまである。[6] 蓋を有するものが30点あるが，そのうち平蓋式が17点を数える。

関東が15点（武蔵国９点）と最も多く，東北に９点，中部に９点，北陸に３点みられる。ここで注目すべきは，東北の９点中７点が陸奥すなわち太平洋側で出土していることである。しかもほとんどは福島県に集中する。中部から関東，陸奥に広がる一鋳式経筒の分布状況は，先にみた近畿系銅鋳製経筒と対象的である。また，これらの分布圏は後にみる東海系外容器の分布圏ともほぼ一致する。一鋳式経筒は近畿や中国，四国にもあるが，量的に東日本において圧倒的に多い。特に福島県と関東では銅鋳製経筒30点中の20点を占めており，この地域の大きな特徴といえよう。

2 銅板製経筒

近畿の銅板製経筒を分類するにあたって，銅鋳製では作り出せない銅板製固有の派手な装飾をもった経筒群を銅板Ａ類，銅鋳製を模した印象を受ける経筒群を銅板Ｂ類とした。さらにＢ類に関しては，最もシンプルな形態である平蓋式は敢えて銅鋳製の模倣品と考える必要もないことからＢｂ類とし，その他をＢａ類として模倣型式に準じて扱った[村木1998b]。九州には銅板製経筒にも武蔵寺型という独自の型式が存在するが[村木1998a]，近畿の銅板製経筒には独自の型式がみられなかったために採った分類法である。

東日本においても近畿同様，銅板製経筒に固有の経筒型式はみられない。そこでここでもＡ類，Ｂａ類，Ｂｂ類に分けて話を進めることにする。

銅板Ａ類（７点）

出羽７・松岡，駿河３・三明寺（５点），美濃５・養老神社

点数は少ないが，いずれも銅板ならではの技術を生かした優品である。松岡経筒の形態は銅板Ｂｂ類にあたるが，全面に鍍金，鍍銀を施し，魚子地に宝草華唐草文をあしらった非常に手の込んだ経筒であるためＡ類に分類した。三明寺経塚からは鏡を底板にしたものを含め，大きな宝珠鈕を銅板で作りつけた手の込んだ銅板製経筒が５点出土している。この経塚には37本もの東海系陶製円筒容器が蜂の巣のように並んでいた。現在伝わる経筒は蓋のない１点を加えて６点に過ぎないが，当初はまだまだ多くの経筒が納められていたと考えられる。養老神社経筒は銅板で作った瓔珞を垂らすなど細々とした加工が施されており優れた作風を示している。地理的にも京からの搬入品とみて間違いあるまい。

銅板Ｂａ類（19点）

陸奥18・木幡山３号〈一段盛蓋式〉，出羽７・松岡〈一段盛蓋式〉，出羽19・東根大森山Ｂ〈一段笠蓋式〉，出羽31・称名寺裏〈一段盛蓋式〉，常陸２・門毛〈二段盛蓋式〉，武蔵３・利仁神社〈一段盛蓋式〉，武蔵13・白山神社〈一段盛蓋式〉，武蔵14・龍見寺〈一段盛蓋式〉，甲斐２・柏尾山６号〈二段盛蓋式（２点）〉，甲斐３・大善寺〈二段盛蓋式〉，信濃２・長谷〈一段笠蓋式〉，飛騨１・白王神社〈二段盛蓋式〉，越後８・上軽井川〈二段盛蓋式（２点）〉，越後９・三諦寺〈二段笠蓋式〉，越中２・京ヶ峰〈一段笠蓋式〉，加賀１・小坂１号墳〈一段盛蓋式（２点）〉

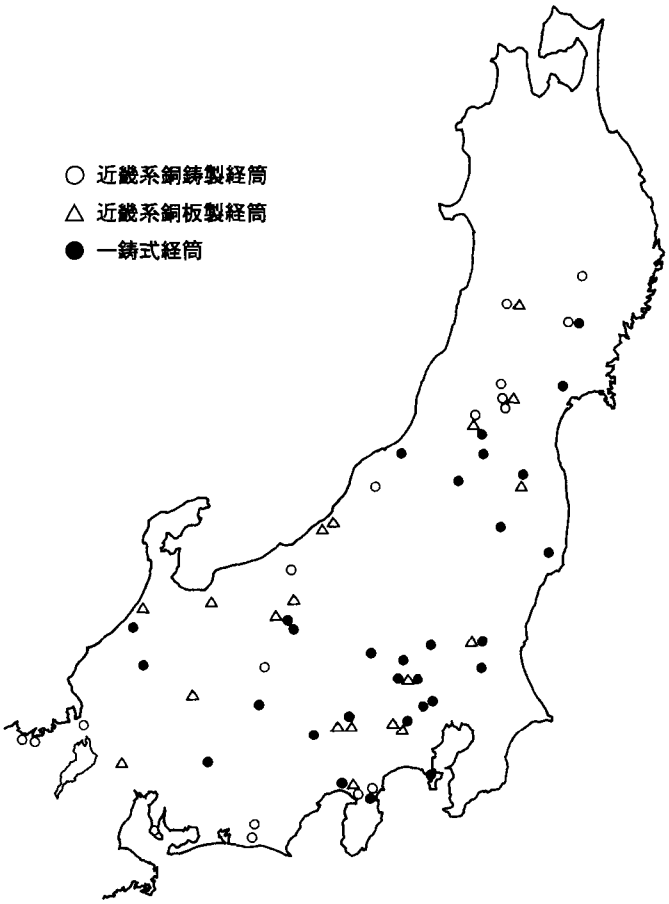


図3　経筒の分布

これらは近畿系銅鋳製経筒を模倣していると考えられるもので，近畿系銅板製経筒と呼べよう。笠蓋式が3点と少ないのは銅鋳製経筒と同様であり，やはり東日本の経筒の特徴といえる。東北4点，関東4点，中部5点，北陸6点と満遍なくみられる。また，中部の5点は近畿系銅鋳製経筒があまりみられない中部高地に分布している。

銅板Bb類（27点）

陸奥10・松野千光寺，出羽13・水沢，出羽14・湯田川1号，出羽17・薬師寺裏山，下総1・等覚寺，下総3・千葉寺（2点），下総4・葛飾八幡宮，武蔵8・実相寺，武蔵9・大丸城（2点），武蔵11・松蓮寺（2点），武蔵12・落合，相模4・比々多神社，相模6・御嶽神社裏山，伊豆1・伊豆山神社，駿河6・医王寺，三河3・観音山，甲斐1・雲峰寺，信濃1・鷲寺，越後1・里本庄，越後5・青海神社，越後11・シラミ，越後12・法定寺，越中3・白山，越前3・下黒谷

銅板製経筒の中では最も粗製のタイプである。東北4点，関東12点，中部5点，北陸6点と各地

にみられるが，特に関東に多いのが目立つ。

銅製経筒の傾向として，日本海側や近畿周縁部では近畿系の経筒が多く，関東では一鋳式経筒や銅板Ｂｂ類経筒が多いことが確認できた。また，東北では銅鋳製経筒が多くみられるが，出羽は近畿系，陸奥は一鋳式の傾向が強い点も指摘できる。

❷……外容器の分類

外容器には陶製の転用品，専用品，石製品，木製品などがある。しかし木製品は残りにくく，駿河７・三島嶽１号経塚で確認されているほか，陸奥10・松野千光寺２号経塚でその可能性を示す木片が出ている程度である[7]。また，先に述べたように壷，甕などが単独で出土するものの中に，経筒あるいは経筒外容器として用いられたものがあると思われるが，蔵骨器など他の用途で使われた可能性もある。ここではそういった遺物は扱わず，経筒を共伴しており外容器の可能性が高い転用品と，経塚に埋納するための専用品だけを対象とする[8]。

１　陶製外容器

ａ．常滑産外容器

常滑産外容器はすべて転用外容器である。これには，装飾性が強く直接経巻を納めて経筒として使用するケースが多い特殊品である三筋壷（二筋壷，四筋壷を含む）と，実用品としての壷・甕がある。前者は小型で中に経筒を入れることができないため，確実に経容器と認定できるものがほとんどない[9]。

常滑壷・甕転用外容器（13ヶ所）

陸奥３・金鶏山，陸奥19・王宮，武蔵５・大山，武蔵６・薬師堂山，武蔵13・白山神社，相模６・御嶽神社裏山，伊豆１・伊豆山神社，駿河５・千鳥道，遠江４・小国神社，甲斐６・秋山，信濃２・長谷，美濃５・養老神社，越前３・下黒谷

経筒と共伴するものに限定しているため点数は少ないが，常滑の経容器は東北２ヶ所，関東４ヶ所，中部６ヶ所，北陸１ヶ所である。東北の例は陸奥に限られる。

ｂ．渥美産外容器

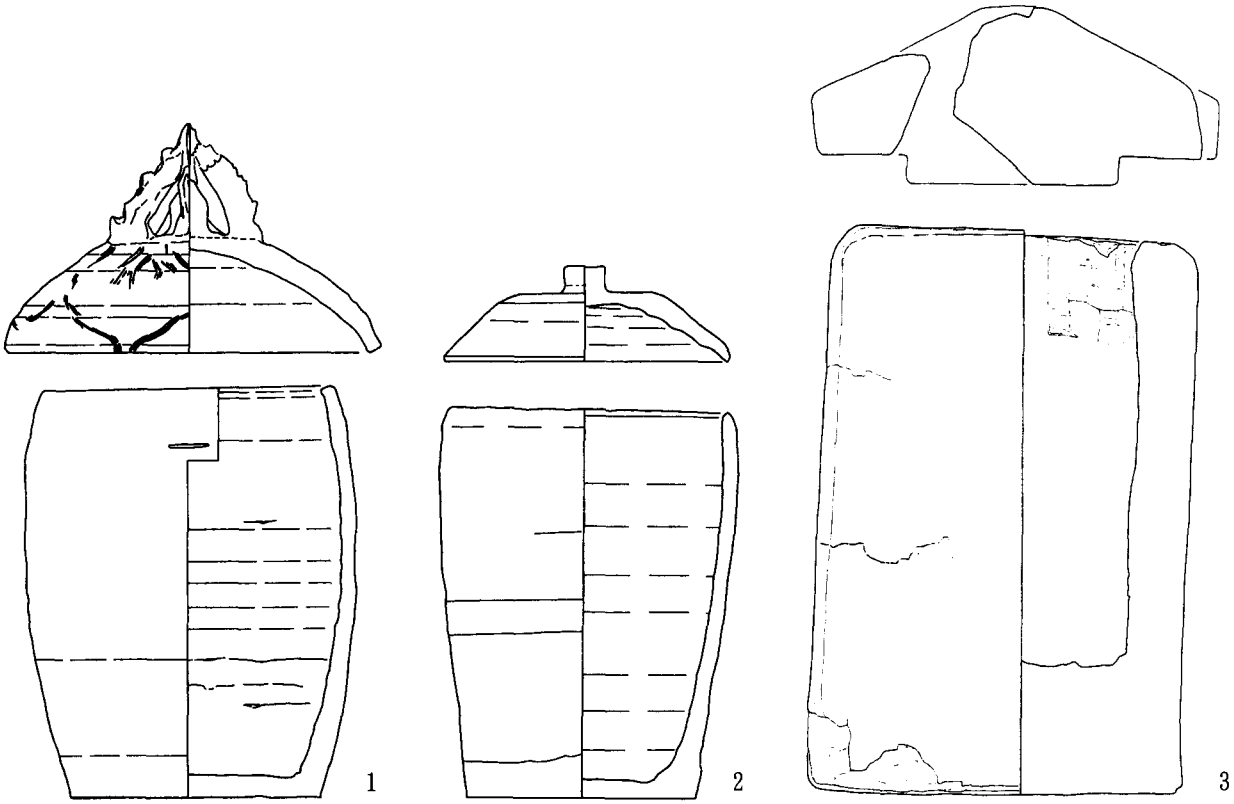
渥美産外容器には，当初より経筒外容器（経筒）として製作された専用品と，壷・甕の転用品がある。専用品はほかに湖西や東遠江でも作られているが，産地の区別が難しいものもあり，ここでは東海系専用経容器として一括して挙げておく。

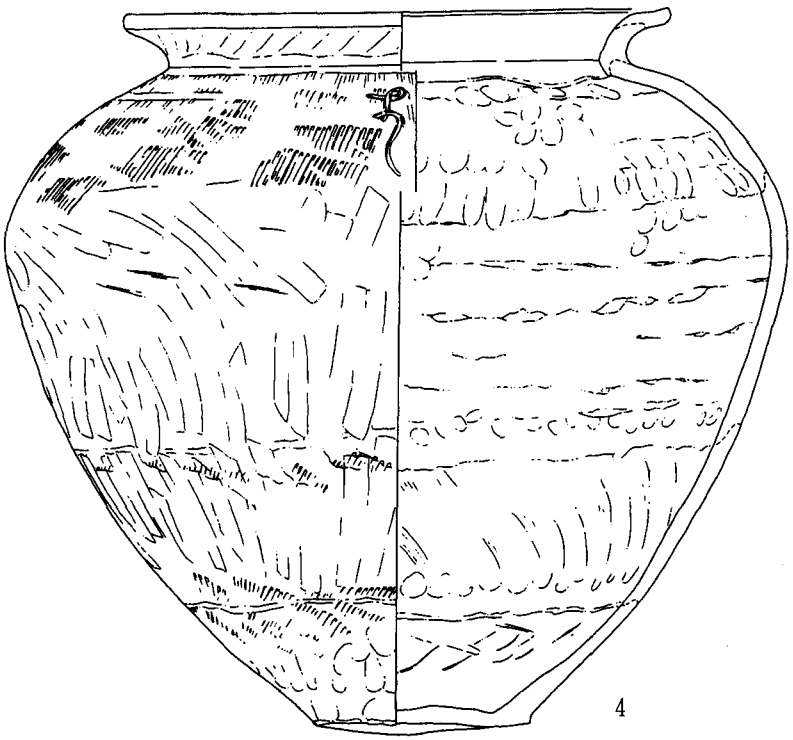
東海系専用経容器（12ヶ所）

駿河３・三明寺，遠江１・島，遠江３・比丘尼，遠江７・勝栗，遠江８・天白磐座，遠江９・行者岩，三河１・鳳来山鏡岩下，三河２・普門寺，三河３・観音山，尾張１・大御堂寺，甲斐４・一の森，美濃２・桜堂

渥美壷・甕転用外容器（10ヶ所）

陸奥３・金鶏山，常陸２・門毛，武蔵13・白山神社，相模１・永福寺，伊豆１・伊豆山神社，





1　越中1・円念寺山3号（珠洲・陶製円筒）
2　駿河3・三明寺（渥美・陶製円筒）
3　陸奥10・松野千光寺（石製方柱形筒）
4　相模1・永福寺（渥美・甕）

0　20cm

図4　外　容　器

駿河2・香貫山，遠江4・小国神社，遠江5・石室寺，遠江6・塔之壇，甲斐1・雲峰寺

渥美等産の経容器は東北1ヶ所，関東3ヶ所，中部18ヶ所，北陸0ヶ所である。東北の例はやはり陸奥である。東海系専用経容器は中部にしかみられなく，地元の尾張・三河・遠江周辺に集中している。これらは伊勢や京都周辺などでも多くみられるが，関東方面へはもち出されないことは注目してよかろう。

c．珠洲系外容器

能登半島先端に築かれた珠洲窯は，日本海側東日本に広くその製品を供給したほか，製陶技術をも広めた。ここでは珠洲窯以外の同一技術系列下の製品も含め珠洲系と呼ぶ。珠洲系外容器には，直接経巻を納めたと思われる四耳壷があるが，常滑産三筋壷と同様に経筒を伴うものはごくわずかである。珠洲系外容器にも当初より経容器として製作された専用品と，実用品としての壷・甕の転用品があり，分けてみていく。

珠洲系専用経容器（4ヶ所）

陸奥10・松野千光寺，越後14・天神山，越中1・円念寺山，越中4・上向田

珠洲系壷・甕転用外容器（30ヶ所）

陸奥10・松野千光寺，陸奥20・米山寺，出羽1・加茂青砂，出羽6・大沢，出羽7・松岡，出羽10・経ヶ倉山，出羽11・大山，出羽14・湯田川，出羽15・狩川，出羽19・東根大森山，出羽21・山形大森山山頂，出羽22・高瀬山，出羽27・普光寺山，出羽28・仁田の沢，出羽34・尼ヶ沢，信濃1・鷲寺，越後1・里本庄，越後2・大沢，越後4・菖蒲塚，越後6・小栗山不動院裏山，越後8・上軽井川，越後9・三諦寺，越後10・大御堂，越後11・シラミ，越後13・関山神社，越中2・京ヶ峰，越中3・白山，越中5・記塚，加賀1・小坂1号墳，加賀2・長滝墓山C

珠洲系経容器は東北15ヶ所，関東0ヶ所，中部1ヶ所，北陸17ヶ所である。東北では大半の13ヶ所は出羽であり，圧倒的に日本海側に偏って分布していることがわかる。また，北陸の17ヶ所であるが，越後，越中，加賀までであり，越前，若狭にはみられない[(10)]。専用外容器は転用品の多い出羽にはなく，あまり遠くまでは広がらない。これは東海系の専用外容器と同じ傾向である。

2　石製外容器

石製外容器には円筒形に削り出すものと，箱形に作るものがある。石材は凝灰岩質のものが多い。

石製外容器（14ヶ所）

陸奥1・毘沙門山，陸奥2・丹内山神社，陸奥9・滝ノ下，陸奥10・松野千光寺，陸奥11・駒壇，陸奥18・木幡山，出羽2・一字山，出羽3・閑居長根，出羽14・湯田川，出羽17・薬師寺裏山，出羽19・東根大森山，出羽30・笠松山，出羽32・別所山，信濃9・放光寺

ほとんどすべて東北である。滑石製経容器は北部九州にのみみられ，当地の特徴的な経塚遺物として有名であるが，西日本一帯を見渡してほかに石製外容器が集中的にみられる地域はなく，点数もごくわずかである。このことを踏まえると，東北における凝灰岩質石製外容器の密度，点数は，北部九州の滑石製品に匹敵するものであることがわかる。これに関しては陸奥，出羽両国にわたって分布しており，東北の経塚遺物の一特徴として挙げることができよう。

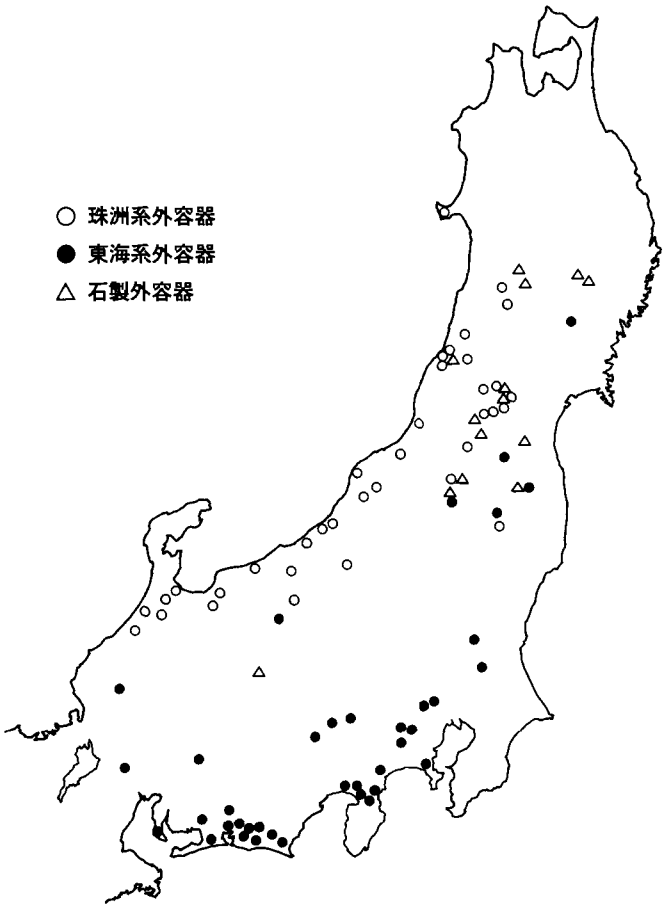


図5　外容器の分布

常滑，渥美などの東海系と，珠洲系が大半を占める中，それ以外の産地の陶製外容器も若干数みられる。渥美と珠洲の技術を取り入れた東北窯の須恵器・瓷器折衷系陶器や，猿投，加賀，越前などである。またほかにも地元産土師器や中国産白磁四耳壷を用いる例もあるが少数であるためここでは立ち入らない。木製外容器については先述の通り残存例が少なく，可能性は考えられるものの研究対象としては扱いにくい。その他産地不明の陶器もあるため東海系，珠洲系だけで外容器分布圏の議論を展開するのは少々危険のきらいがあるが，これらが大半を占めることは事実であり，大きく齟齬をきたすことはないであろう。

東海系，珠洲系の外容器の大半は壷・甕の転用品である。これはすなわち生活雑器そのものの分布と同様であることはいうまでもない。12～13世紀の東日本は，日本海側に珠洲系，太平洋側に渥美・常滑の東海系陶器が広域流通していたことはよく知られている[吉岡1985]。外容器のあり方はそれをトレースするに過ぎないものの，専用品の分布域は遠隔に延びないことは重要である。京都周辺では経塚を作る際にわざわざ東海系の専用品を取り寄せるのに対し，東日本ではそのために重

量のある外容器を遠くまで発注するようなことはせず，地元周辺の製品や身近な雑器を転用してすませているわけである。

❸……埋納法の分類

経塚は上部構造が不明なものがほとんどであるが，石室など地下の構造は発掘調査や発見当時の記録からある程度わかるものがある。これらの地下構造は大きく，石室をもつもの，もたないもの，洞穴や岩の間隙に納めるもの，に分けられ，これをさらに細分化して分類するのが基本である[稲垣1977]。しかし，遺構の詳細な分類は共通点をかえってわかりにくくすることがある。経塚を造営するにあたって，さまざまな作法，儀式が執りおこなわれた。(11) その次第の詳細は残念ながら考古学的に追究するにはまだ困難であるが，経筒を埋納する保護施設のあり方は最も端的に埋納法を反映していると考えられる。そこで，本稿では，石室と外容器の有無にしぼって埋納法を分類する。以下に詳細な情報がわかる代表的な経塚事例を取り上げ，類例を挙げていくことにする。

1　外容器を用いる例

石室を設けて外容器を据え，その中に経筒を納める2重の保護施設をもつものと，石室をもたないものとがある。前者を外容器－有室式，後者を外容器－無室式と呼んで区別する。

出羽30・笠松山1号経塚は2重の周溝が巡る帆立貝形の墳丘頂部に一辺約1.5mの方形竪穴を掘り，中央約60cmをさらに掘りくぼめて内側に礫を立て並べて石室を造る。そこに石製専用外容器を据え，一段盛蓋式経筒を納めている。石室の内部には木炭が充填され，石室は方形に整えた石で蓋をしてある。また石室の上面にあたる第1掘形の床面には，石室をはさんで刃を外向けにした2点の刀子が置かれている[白鷹町教育委員会1988]。

越後8・上軽井川経塚は径125cmの土坑を掘って粘土混じりの土を敷き，中央を5個のやや大きな石で囲い基礎を造り，刀子を1点置く。珠洲系甕を転用した外容器を据え，中に同形態の二段盛蓋式銅板Ｂａ類経筒2点を納め，珠洲系片口鉢で蓋をしてある。外容器の周囲に拳大の石を積み上げ，安定させつつ囲う有室式である。石室上層には木炭を放射状に並べ，土を被せてさらに石で覆う。上部は塚状に盛り上がっている。石組は土坑との間隙を充填するものではなく，土坑から独立して積み上げられているため石室として扱う。経筒には2点ともに建久8年（1197）の銘文が刻まれている[金子1965]。

これらは外容器－有室式であるが，上記の例も含め以下のように15遺跡18遺構で確認できる。

外容器－有室式

陸奥10・松野千光寺2号，陸奥18・木幡山3号，陸奥20・米山寺3号，出羽3・閑居長根2号，出羽14・湯田川1号，出羽21・山形大森山山頂，出羽30・笠松山1号，武蔵12・落合，相模1・永福寺，甲斐2・柏尾山2号，信濃1・鷲寺，越後8・上軽井川，越前3・下黒谷，越前6・大椋神社1号，同2号，若狭2・田烏元山谷1－2号，同1－3号，同4号

加賀2・長滝墓山Ｃ経塚は上面156cm×148cmの楕円形土坑を上部はほぼ垂直に，下部は擂鉢状に深さ170cmまで掘りくぼめ，珠洲系甕を転用した外容器を据える。中に平蓋式の一鋳式経筒を納め珠

洲系片口鉢で蓋をしてある。外容器の下から火打金と銭貨，肩部周辺から短刀，刀子，素文方鏡などが出土している。これらを礫で覆った後，埋め戻し，上面にもう一度礫を積んである。珠洲系甕の生産年代は12世紀第4四半期とされている[(財)石川県埋蔵文化財センター1999]。

これは外容器－無室式である。次のように6遺跡6遺構が挙げられる。

外容器－無室式

出羽15・狩川，駿河3・三明寺，信濃2・長谷，美濃5・養老神社，加賀1・小坂1号墳，加賀2・長滝墓山C

2　外容器を用いない例

外容器を用いないものにも，石室に納めるものと，保護施設なしに土坑に埋めるものがある。前者を直納－有室式，後者を直納－無室式と呼ぶ。陶製や石製の専用容器は直接経巻を納めて経筒としているものもあろうが，木製や竹製の経筒を間接容器とし，外容器として使用している可能性もあるため，ここではそれらの例は除いて考える。

陸奥24・上ノ原経塚は径約2mの土坑に一辺約30cmの小石室を設ける有室式である。一段盛蓋式の一鋳式経筒を据え，石室と経筒の間に木炭を詰める。土坑と石室の間に石を詰める際，隙間に刀子11点（小さく折ったものあり），鉄鏃3点，土師器1点を副納している[いわき市教育委員会1998]。

武蔵14・龍見寺経塚は上面約1.6m×1.2mの不整楕円形土坑を2段に掘りくぼめ，底石を据える。一段盛蓋式の銅板Ｂａ類経筒を底石の上に置き，経筒を囲むように石室状に礫を積み上げて蓋をしている。副納品はない[館町龍見寺地区試掘調査団1997]。

これらは直納－有室式である。以上の例も含めて次の通り12遺跡13遺構で確認できる。

直納－有室式

陸奥4・田東山5号，陸奥8・鶉崎，陸奥22・熊野神社，陸奥24・上ノ原，出羽5・上溝観音寺1号，出羽13・水沢，出羽31・称名寺裏，常陸3・東城寺1号，同3号，下総2・谷津，上野1・別所，武蔵14・龍見寺，甲斐2・柏尾山6号

武蔵9・大丸城経塚は最長77cm×88cm，最深43cmの不整形土坑に直接銅板Ｂｂ式経筒2点を並置する無室式である。土坑には下層から，砂，木炭，粉炭混じりの砂を詰めて，上面は川原石で被覆している。副納品はない[(財)東京都埋蔵文化財センター1987]。

これは直納－無室式である。この例も含め，下記の通り4遺跡5遺構でみられる。

直納－無室式

常陸3・東城寺10号，下総3・千葉寺，武蔵1・妻沼1号，同3号，武蔵9・大丸城

東日本の経塚全般をみるには，36遺跡42遺構とやや資料数が少ないが，これだけでも地域性が浮かび上がってくる。

東北は15遺跡15遺構と比較的資料数に恵まれている。その内の14例が有室式であることは大きな特徴であるといえよう。外容器の有無は8例対7例と半ばする。陸奥と出羽の差も違いはみられない。関東は9遺跡12遺構と東北に次ぐ資料数である。石室の有無では7例対5例と大きく違わない

が，外容器を用いない直納が10例もあることが特徴といえよう。特に全く経筒を保護しない直納－無室式は他の地域ではみられない埋納法である。中部は5遺跡6遺構と資料数に乏しい。石室の有無は3例対3例と同じであるが，大半の5例が外容器を用いている。外容器の供給先を控えていることからも肯えよう。北陸は最近の調査例のおかげで6遺跡9遺構に増えた。石室の有無は4遺跡7遺構例対2遺跡2遺構例と有室式が優勢である。また，すべて転用外容器を用いており，中部同様陶器の生産地に近いことが要因と考えられる。

経塚を造るに際し，東北では一般に石室を設け，関東では外容器を用いずに直接経筒を埋納する傾向がある。また，豊富な焼き物の産地を擁する中部，北陸では経筒を外容器に納めて埋納するのが一般的である，ということがわかる。

❹……東日本の経塚の地域区分とその傾向

1　東日本の経筒・外容器・埋納法の特徴

東日本の経筒・外容器・埋納法について検証してきた。これらから明らかになった事実をまとめ，東日本の経塚を地域区分してみる。

経筒に関して特徴的であったのは，関東と出羽・北陸にみられた顕著な差である。近畿系経筒の使用は，近畿の経筒に対する志向性を表していると考えられる。関東ではこれら近畿志向の経筒がほとんどみられなく，一鋳式の経筒が非常に多い。出羽・北陸では逆に一鋳式の経筒は少なく，近畿志向の経筒が多い。これは両地域における，近畿を中心とした経塚文化に対する受け入れ方の違いを示しているだけでなく，関東の文化的基盤が近畿から独立したものを形成するに足るものであったことを考えさせる。また，一鋳式経筒は東北ではほとんど陸奥にしかみられない。出羽の2点はいずれも置賜郡（山形県南東部）の経筒で，会津地域の影響が強いと考えられる。同様のことは阿賀野川水系で会津との交通が盛んな越後の大沢経筒にもいえよう。中部における近畿系経筒の大半は渥美半島を中心とした尾張・三河・遠江に集中している。また近畿系経筒でも越前の谷口経筒，若狭の丸山，田烏元山谷1－2号経筒などは丹後を中心とした三丹の経塚でみられる一段盛蓋A式と近似している。三丹の経塚は12世紀末に急激に増えていくが，これらの経塚にもその影響を考慮する必要があろう。

外容器に関しては，従来からいわれているとおり常滑・渥美などの東海系と，珠洲系との分布の差がはっきりと現れた。東海系は陸奥から，関東，中部にみられるのに対し，珠洲系は出羽から越後，越中と加賀以東の日本海側にみられる。両広域流通陶器の分布圏がそのまま反映しているわけである。ただ，専用経容器に関しては生産地に近いところにほぼ限られることが指摘できる。ところで，陸奥の松野千光寺経塚は会津盆地に所在するが，珠洲系の陶器を埋納している。一方で一鋳式経筒も出土しており，日本海側と太平洋側の両方の要素をもっているといえよう。先に触れた置賜郡の経筒や越後の大沢経筒など，会津周辺では日本海側と太平洋側の特徴が混在した様相がみられる。また凝灰岩質石製外容器は東北に特徴的な遺物であるが，これは陸奥，出羽を問わず東北一帯で使われている。

埋納法に関しては，石室，外容器の組み合わせはあまり問題にならなかった。外容器については，

関東では使用せずに経筒を石室や土坑に直接埋納する直納式が多く，常滑・渥美を擁する中部や，珠洲を控える北陸では越前，若狭を含め，外容器を使用する傾向がある。また石室については，東北では有室式が一般的である。

2　東日本の経塚の地域区分

a．陸奥の経塚

太平洋側東北地方一帯の経塚。陸奥の経塚というと平泉周辺を想起するが，むしろ南部の福島県域に多い。関東北部は経塚の少ない地帯なので関東とは一線を画している。経筒は近畿を志向した近畿系と一鋳式とが使用されるが，一鋳式が優勢である。銅板製はあまりみられない。外容器は石製品の使用が目立つが，渥美や常滑の陶器に直接経巻を入れたものも相当数あると予想される[(12)]。石室はすべて有室式である。

b．出羽の経塚

日本海側東北地方一帯の経塚。ほとんどは南部の山形県域であるが，ここは東日本で最も経塚の多い地帯である。経筒は近畿系が多く，一鋳式はほとんどみられない。外容器は珠洲系陶器と石製品が使用される。石室はほとんど有室式である。有紀年銘資料で最も古いものは保延6年（1140）の別所山経筒である。これは先に触れた置賜郡の一鋳式経筒で，会津方面の影響が考えられる。会津には大治5年（1130）銘の一鋳式松野千光寺1号経筒もあり，見逃せない。ただ，山形県内の大多数の経塚は最上川沿いに分布する。これらの経塚に近畿系経筒がしばしばみられることから，後から入ってきた日本海側経由の経塚が，この地の経塚造営に火をつけたと考えられる。

c．関東の経塚

関東地方一帯の経塚。武蔵・相模に密にみられる。経筒は一鋳式が多く，近畿系はほとんどみられない。銅板製もほとんどが最も単純なＢｂ類である。外容器は東海系転用品に限られる。ただし出土状況のわかる経塚では，ほとんどが外容器を使用しない直納式である。関東の経塚は東日本の他の地域の経塚と違い，近畿の経筒を模倣しようとせず，埋納法も他では見られない直納－無室式がしばしば見られる。経塚という京の文化を在地で消化し，東日本の中でも特徴的な経塚文化を形成した地域である。

d．中部高地・静岡東部の経塚

中部高地から駿河・伊豆にかけての山岳地帯の経塚。経筒は近畿系と一鋳式とが使用されるが，近畿系は銅板Ｂａ類が多い。外容器を使用する例がほとんどで，それは東海系にほぼ限られ，専用品もみられる。関東の経塚と次にみる東海西部の経塚との要素が混ざり合った地域といえる。

e．東海西部の経塚

濃尾平野から三遠地域に広がる平野地帯の経塚。経筒は近畿系が多く，それらはすべて銅鋳製である。外容器を必ず使用するが東海系に限られ，特に専用品が多く使用されている。これは経塚が集中する伊勢地域での傾向とも同じであり[伊勢市立郷土資料館1991]，伊勢をも含めた一帯を東海西部の経塚と呼べよう。ここは大規模な窯業地帯を抱えており，京の経塚造営に際して専用品を供給している。そのため京の経塚の情報が伝わりやすかったことも，この地域の経塚に影響を与えていよう。

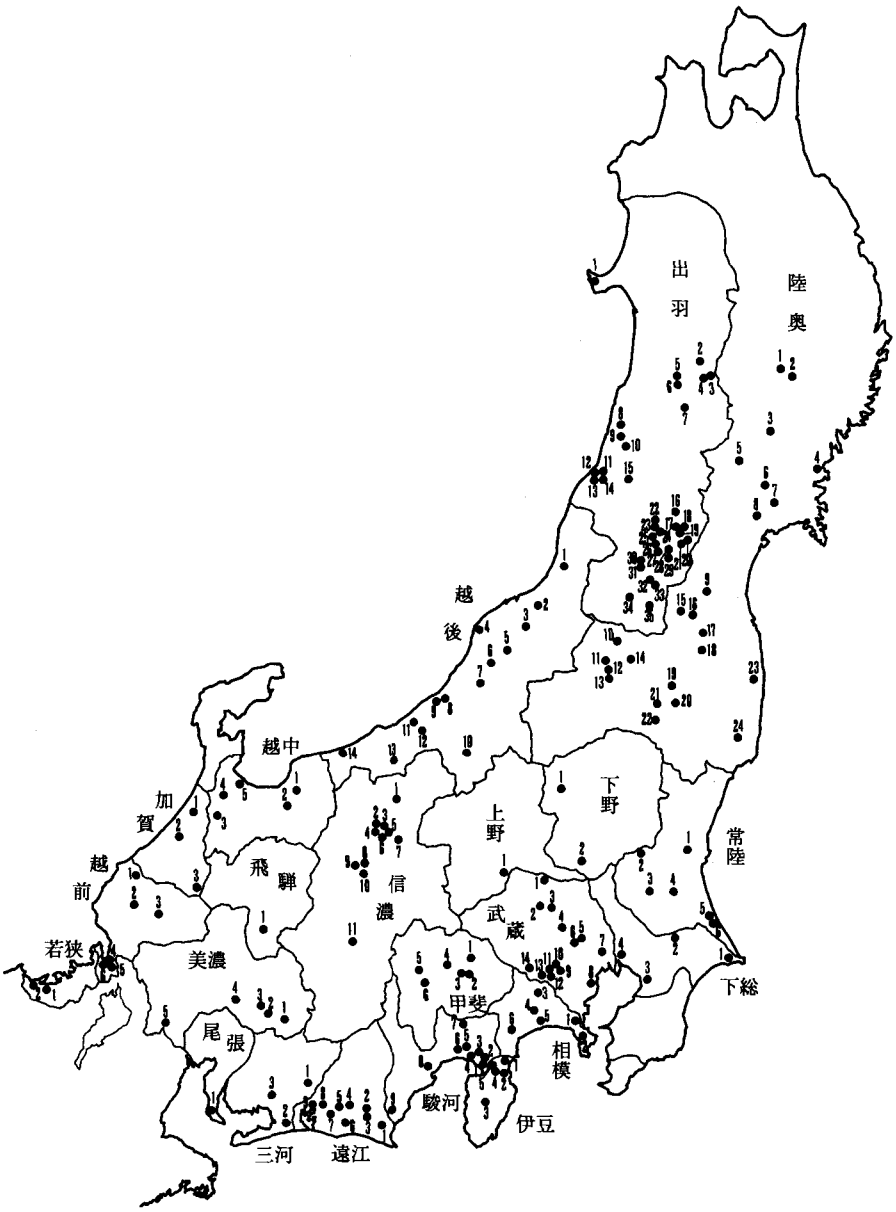


図6　東日本の経塚

f．加越の経塚

越前北東部から越後に至る北陸地域の経塚。経筒は銅鋳製，銅板製ともに近畿系が多い。出土状況のわかる例が少ないがいずれも外容器を使用しており，それは珠洲系に限られる。珠洲系の専用品は京や三丹地域ではまったくみられず，東海のような形で京の経塚が影響を与えたわけではない。しかし当時の活発な日本海交通路を思うと，京の経塚についての情報はこの地に頻繁に伝わり，多大な影響を与えたことは間違いない。

g．嶺南の経塚

近畿北部に隣接する若狭・敦賀の福井県嶺南地方の経塚。経筒は近畿系が多く，近畿から直接も

ち込まれたものも多いと考えられる。特に西側には日本海沿岸地域に範囲を拡大していった三丹の経塚地域が控えており，その大きな特徴である一段盛蓋A式が入っていることは見逃せない。三丹地域の経塚の延長上で理解していくべきであろう。外容器は雑多であるが珠洲系はみられず，三丹地域に多い土師質円筒容器が出土している。遺構はすべて外容器－有室式である。

以上のように東日本の経塚は7地域に区分できる。ただし，隣接する経塚地域とはある程度類似した性格がみられるのは否めない。そんな中で，やはり目につくのは関東の経塚の独自性である。経塚は京で発生し各地に広がった文化である。九州ではそれをいち早く流行させ，近畿とは違った展開を見せたことは以前拙稿で論じた[村木1998a]。これに比べると資料数は少ないものの，経筒の形態，埋納法ともに独特である関東の経塚もまた京とは異なる経塚文化と位置付けられよう。その他の地域もこのように俯瞰してくると，地域色豊かな経塚文化を築いている。中世初頭の日本列島の多様性がそのまま反映しているといえよう。

東日本の経塚を考察するための基本的な枠組みは設けられたと思われる。九州や近畿での作業も加え，これらを基礎にして，今後は寺社や墓地との関連の中で経塚をとらえ，当時の宗教的，社会的諸相に踏み込んでいきたい。

本稿をなすにあたって，以下の方々にお世話になりました。末筆ながら記して心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

上原真人・川崎利夫・川村俊彦・久保智康・杉山　洋・時枝　務・宮川禎一・吉岡康暢・吉澤　悟

参考文献

伊勢市立郷土資料館　1991『伊勢の経塚』特別展図録第5冊
伊藤啓雄　1998「新潟県における経塚研究の現状と課題」『柏崎市立博物館館報』12
伊藤啓雄　2002「中世前期における出羽の経塚」『中世出羽の宗教と民衆』高志書院
稲垣晋也　1977「経塚と遺物」『経塚遺宝』奈良国立博物館編 東京美術
いわき市教育委員会　1998『上ノ原経塚』
岩手県立博物館　2000『岩手の経塚』第50回企画展図録
金子拓男　1965「新潟県柏崎市上軽井川の経塚」『越佐研究』22
唐澤至朗　1998「群馬の経塚」『群馬県立歴史博物館紀要』19
川崎利夫　1991「山形県の埋、納経遺跡」『山形考古学』4-4
川崎利夫　2002「山形県の経塚とその特色」『歴史考古学』50
木村　修　1995「千葉県および房総関係の経塚」『千葉文華』30
(財)石川県埋蔵文化財センター　1999『能美丘陵東遺跡群Ⅳ』
(財)東京都埋蔵文化財センター　1987「No.513遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』昭和60年度（第4分冊）
白鷹町教育委員会　1988『笠松山遺跡発掘調査報告書』
杉山　洋　1983「熊野三山の経塚」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
関　秀夫　1984『経塚地名総覧』考古学ライブラリー24 ニューサイエンス社
関　秀夫　1990「「経塚」の概念」『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版
館町龍見寺地区試掘調査団　1997『館町龍見寺経塚』
冨永樹之　2002「神奈川の経塚」『神奈川考古』38
奈良修介　1957「秋田の経塚」『考古学雑誌』42-4
野沢　均　1999「埼玉の経塚」『考古学論究』6
藤沼邦彦　1975「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館研究紀要』1

松谷時太郎　1958「越後の経塚」『越佐研究』13
水口富夫　1987「豊岡市気比大平寺経塚遺物」『わたりやぐら』5 兵庫県立歴史博物館研究ノート
三宅敏之　1970「古代郷土生活の歴史考古学―経塚を通じてみた福島県の場合」『郷土史研究講座』2 朝倉書店（一部改定の上「福島県の経塚」として三宅敏之1983『経塚論攷』雄山閣出版に再録）
皆川義孝　2001「下野の経塚資料とその特徴」『栃木県立博物館研究紀要－人文－』18
村上雅紀　2002「福井県における経塚・中世墳墓の様相」『朝日町文化財調査報告書Ⅱ』
村木二郎　1998a「九州の経塚造営体制」『古文化談叢』40
村木二郎　1998b「近畿の経塚」『史林』81-2
村木二郎　2003「経塚に埋納された鏡」『鏡にうつしだされた東アジアと日本』ミネルヴァ書房
森内秀造　1992「経筒の形態からみた兵庫県の経塚」『兵庫の経塚』博物館普及資料第10集 兵庫県立歴史博物館
森嶋　稔　1981「信濃の経塚資料にみる二、三の課題」『信濃』33-12
吉岡康暢　1985「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『石川県立郷土資料館紀要』14

註

（1）── 13世紀にも出羽・羽黒山頂経塚のように「納経の経塚」に相当するものが存在する。この経筒には「妙法蓮華経一部 六十六部内」と記されており六十六部納経の早い例であることがわかる。経筒も筒身高が15cm以下と小型であり，次代の納経用経筒を髣髴させる。こういった小型の経筒は納経用と考えられ，中世後期の「納経の経塚」の中で捉えるべきと考え，本稿では扱わないことにする。

（2）── 経筒か外容器かわからない容器を「経容器」と呼ぶことにする。

（3）── 本稿の記述のうち個々の経塚に関しては表対応文献を参照されたい。

（4）── 形態的には近畿系に相当するが，口径が非常に大きい大型経筒がある。相模1・永福寺経筒（口径約24cm），駿河7・三島嶽2号経筒（口径28.2cm），遠江4・小国神社経筒（口径18.0cm）である。これらに関してはプロポーション的に大きく異なるため近畿系とは考えない。

（5）── 下総4・葛飾八幡宮の銅板製経筒の1点も鏡を蓋に用いたといわれているが，大きさが全く合わないため鏡蓋とは考えないことにする。

（6）── 杉山洋氏は細めのものと太めのものを，それぞれが出土した場所にちなんで神倉山タイプ，那智タイプと分類している[杉山1983]。

（7）── 松野千光寺2号経塚例は不確かなため，木製経筒とは考えないことにする。

（8）── 専用品は直接経巻を納めた経筒であるかもしれないが，竹製，木製経筒が入っていた可能性もあり，すべて外容器の項目で扱っておく。

（9）── 陸奥19・王宮の経容器は常滑産三筋壷であるが，蓋に用いた鏡に「如法経」と記されていることから経巻を納めたと考えられるため，経筒を伴わないがここに加えている。

(10) ── 珠洲系甕転用外容器は，但馬の大平寺経塚でも使用されており[水口1987]，若狭より西側まで分布している。

(11) ── 嘉禎2年（1236）に宗快が撰述した『如法経現修作法』（正嘉元年（1257）に編纂されたと思われる『如法経手記』などに，さまざまな手続きを踏んだ埋経の次第が記されている。

(12) ── 岩手県内には経塚にみられるような石室の中に陶磁器だけを埋納した例が非常に多くみられる。[岩手県立博物館2002]はそういった遺跡を丹念に拾い上げた力作である。

挿図出典

図1-3 表28文献。図1-6 表81文献。図1-7 表29文献。図3-1 表87文献。図3-3 表6文献。図3-4 表46文献。再トレースをし，一部修正を加えたものがある。その他は筆者が実測した。図1-1,2,8，図2-1～4，6～8，図3-2 東京国立博物館所蔵。図1-4,5 京都大学所蔵。図2-5 新潟県豊浦町教育委員会所蔵。

番号	経塚	年号	経筒	外容器	外容器蓋	石室	埋納法	備考	文献
陸奥1	毘沙門山		二段盛蓋式						1
			銅×3						
				陶筒					
				石櫃					
陸奥2	丹内山神社1			石筒	無	有			2
陸奥3	金鶏山		二段盛蓋式	◇渥美袈裟壷					1
				常滑甕×4					
	伝・金鶏山		一鋳平蓋式	三突帯陶筒					3
陸奥4	田束山5		平蓋式			有	直納－有室	鏡底	4
陸奥5	花山寺1		銅			無		底板のみ出土	5
陸奥6	経壇		銅	甕	平瓦				4
陸奥7	緑山		経筒			有			4
陸奥8	鶏崎		一鋳一盛式			有	直納－有室		4
陸奥9	滝ノ下		銅	石櫃					4
陸奥10	松野千光寺	1130	一鋳一盛式	石櫃	蓋付				6
			銅板Bb類	〃	〃				
				珠洲円筒					
				珠洲甕					
				珠洲四耳壷2					
				大戸甕×2					
	松野千光寺SK02		一鋳式特殊	木箱？		有	専用－有室		
陸奥11	駒壇			石筒	倒立	無			7
陸奥12	雷神山		銅	◇渥美壷		有			7
陸奥13	塔寺		経筒×2						7
陸奥14	白津八幡山		金銅板	陶容器					7
陸奥15	天王寺	1171		陶筒		有			8
				陶甕×2		〃			
				常滑三筋壷		〃			
陸奥16	平沢寺	1171		陶筒	石				8
陸奥17	霊山寺		一鋳平蓋式	◇陶容器					8
陸奥18	木幡山1			石筒		有			9
	木幡山3		銅板Ba類・一盛式	石筒	蓋付	有	専用－有室		
	木幡山4			石筒		有			
	木幡山6			石筒×2		有			
陸奥19	王宮			常滑三筋壷				鏡に「如法経」銘	8
				陶壷					
陸奥20	米山寺1		銅	◇珠洲甕					10
	米山寺3	1171	一鋳式	陶筒	蓋付	有	専用－有室		
陸奥21	丹波楯山		鉄鋳						10
陸奥22	熊野神社		平蓋式			有	直納－有室		8
陸奥23	榎内 号不明		銅	◇白磁壷					11
陸奥24	上ノ原		一鋳一盛式			有	直納－有室		12
出羽1	加茂青砂		竹	珠洲壷	石				13
出羽2	一字山	1168	銅	石櫃					
出羽3	閑居長根2	1206	平蓋式	石櫃		有	専用－有室	鏡蓋	14
出羽4	真坂		鉄						14
出羽5	上溝観音寺1	1149	銅			岩盤刳貫	直納－有室		14
	上溝観音寺2		銅	折衷甕	片口鉢				
出羽6	大沢		銅	珠洲甕					14
出羽7	松岡	1184	銅板Ba類・一盛式	◇珠洲甕	◇珠洲片口鉢	無			15
			金銀銅板A類	◇珠洲甕		〃		鏡底	
		1196	一段盛蓋式	◇折衷甕		〃		鏡底	
			一段盛蓋式			〃			
出羽8	金俣		木	土師筒	蓋付	岩窟			16
出羽9	鷹尾山A		陶筒	陶筒	黒色土器				17
出羽10	経ヶ倉山		陶筒	珠洲甕		岩窟			18
出羽11	大山		平蓋式	珠洲甕	珠洲片口鉢			鏡蓋	19
出羽12	西目			陶筒					19
				珠洲甕					
出羽13	水沢		銅板Bb類			有	直納－有室		20
出羽14	湯田川1		銅板Bb類	珠洲甕	倒立	有	転用－有室		21
	湯田川2			石櫃					
出羽15	狩川		銅板	珠洲甕		無	転用－無室		22
出羽16	河島山A		二段盛蓋式	◇甕					23
出羽17	薬師寺裏山		銅板Bb類	石筒	蓋付				24
				珠洲壷					
出羽18	観音寺	1205	陶壷	陶甕					23
出羽19	東根大森山A			珠洲壷					25
				珠洲甕×2					
				石筒	蓋付				
				石櫃	蓋付				
	東根大森山B		二段盛蓋式	珠洲甕					
			二段盛蓋式	〃					
			平蓋式	珠洲甕					
			銅板Ba類・一笠式	珠洲甕					
				珠洲四耳壷					
				陶筒	蓋付				
出羽20	立石寺	1167	銅鋳						23
出羽21	山形大森山山頂		一段盛蓋式	珠洲甕	石	有	転用－有室		26
出羽22	高瀬山		鉄	◇珠洲壷					27
				◇珠洲甕					
				◇陶筒	蓋付				

番号	経　塚	年号	経　筒	外容器	外容器蓋	石　室	埋納法	備　考	文献
出羽23	平塩			陶筒	蓋付				23
出羽24	滝		平蓋式						23
出羽25	安国寺裏山			陶筒	蓋付				23
出羽26	根際		銅板						23
出羽27	普光寺山		銅鋳×3	◇陶筒×2					23
				◇珠洲甕×2					
出羽28	仁田の沢		平蓋式	珠洲甕				鏡底蓋	23
出羽29	谷柏山			陶筒	蓋付				23
出羽30	笠松山1		二段盛蓋式	石筒	蓋付	有	専用－有室		28
	笠松山2			石筒	蓋付	有			
出羽31	称名寺裏		銅板Ba類・一盛式			有	直納－有室		29
出羽32	別所山	1140	一鋳式特殊	石櫃					23
出羽33	烏帽子山		平蓋式	陶筒				鏡蓋	23
出羽34	尼ヶ沢		鉄鋳	珠洲甕					23
			鉄鋳	瓦質壷					
出羽35	元和田		一鋳一笠式						23
常陸1	神崎寺	1133	銅鋳特殊	◇陶筒	蓋付				30
常陸2	門毛		一鋳平蓋式	◇土師筒	蓋付				31
			平蓋式	◇常滑三筋壷×3					
			銅板Ba類・二盛式	◇常滑三筋四耳壷					
			銅板×3	◇渥美大甕					
				◇渥美壷×3					
常陸3	東城寺1	1124	銅鋳特殊			有	直納－有室		32
	東城寺3	1122	一鋳式			有	直納－有室		
	東城寺10		経筒			無	直納－無室		
	東城寺 号不明		銅鋳	◇陶壷					
			銅×2						
				常滑三筋壷					
常陸4	雷電山古墳		平蓋式	◇陶壷					33
常陸5	鹿島神宮	大治	銅					1125～31年	34
			銅×2						
常陸6	鹿島神宮寺		平蓋式						31
下総1	等覚寺	1252	金銅板Bb類						34
下総2	谷津	1129	銅鋳特殊			有	直納－有室		30
下総3	千葉寺		銅板Bb類			無	直納－無室	鏡底	35
			銅板Bb類			〃		鏡底	
下総4	葛飾八幡宮		銅板					鏡蓋？	30
			銅板Bb類						
下野1	男体山	1221	銅板						36
下野2	小野寺	1104	一鋳一笠式						37
上野1	別所		一鋳平蓋式			有	直納－有室		38
			一鋳平蓋式			〃			
武蔵1	妻沼1	久安	一鋳平蓋式			無	直納－無室	1145～51年	30
	妻沼2			陶甕		無		経巻出土	
	妻沼3		一鋳式特殊			無	直納－無室		
武蔵2	平沢寺	1148	一鋳式						39
武蔵3	利仁神社		銅板Ba類・一盛式	陶甕					40
		1196	一鋳一盛式	◇陶筒×4	蓋付×4				
武蔵4	烏山	1173	銅						41
武蔵5	大山		一鋳式	◇常滑甕×3		有			42
武蔵6	薬師堂山		一鋳平蓋式	◇常滑甕×2	常滑片口鉢			鏡蓋	42
武蔵7	伊興		鉄板×5						30
武蔵8	実相寺	1165	銅板Bb類						39
武蔵9	大丸城		銅板Bb類			無	直納－無室	鏡底	43
			銅板Bb類			〃			
武蔵10	定光寺	1167	銅						39
武蔵11	松蓮寺	1163	銅板Bb類						39
		1165	銅板Bb類						
		1193	銅						
武蔵12	落合		銅板Bb類	猿投短頸壷		有	転用－有室		44
武蔵13	白山神社	1154	一鋳平蓋式						44
			一鋳平蓋式	◇陶筒					
			一鋳二盛式	◇渥美甕					
			銅板Ba類・一盛式						
			銅板	常滑甕					
武蔵14	龍見寺		銅板Ba類・一盛式			有	直納－有室		45
相模1	永福寺		銅鋳大型	渥美大甕	片口鉢	岩盤刳貫	転用－有室	口径約24cm	46
相模2	衣笠城		一鋳平蓋式			岩窟窪み			47
相模3	八菅山			陶筒					47
				常滑三筋壷×5					
				常滑甕×5					
				渥美壷					
				陶壷×11					
相模4	比々多神社		銅板Bb類	丸瓦					47
相模5	琉球山	1154	金銅						47
相模6	御嶽神社裏山		金銅板Bb類	◇常滑三筋壷					47
				◇常滑甕					
伊豆1	伊豆山神社	1117	銅鋳特殊	◇陶筒×4					48
			一鋳一盛式	◇土師筒					
			一段盛蓋式	◇常滑甕					
			平蓋式	◇渥美壷×4					
			銅鋳×2						

番号	経塚	年号	経筒	外容器	外容器蓋	石室	埋納法	備考	文献
			銅板Bb類						
			銅板×2						
			銅×4						
		1172						←和鏡銘	
伊豆2	多賀神社		銅鋳			無			30
伊豆3	善名寺		金銅	◇陶片					49
伊豆4	下伊勢平		銅板	陶甕					49
				渥美蓮弁壷					
伊豆5	願塚		銅板×3						50
駿河1	牛臥山		銅×4	◇陶壷×4					51
駿河2	香貫山		二段盛蓋式			無			51
			平蓋式			〃			
				渥美蓮弁壷	渥美片口鉢	無			
				渥美二筋壷		無			
駿河3	三明寺	1196	銅板A類	渥美円筒	蓋付	無	専用－無室		51
		1196	銅板A類	渥美円筒	蓋付	〃			
		1196	銅板A類	渥美円筒		〃			
		1196	銅板A類	渥美円筒		〃			
			銅板A類	渥美円筒		〃			
			銅板	渥美円筒		〃			
				東海円筒×31		〃			
駿河4	道尾塚		経筒					鏡蓋？	51
駿河5	千鳥道	1168	一鋳平蓋式	◇常滑甕					51
			一鋳平蓋式	◇常滑甕					
			銅鋳大型	◇猿投壷					
駿河6	医王寺	1174	銅板Bb類						50
駿河7	三島嶽1			木箱		無		経巻出土	52
	三島嶽2	承久	銅鋳大型					1219～22年	
								口径28.2cm	
			銅板						
			銅						
駿河8	杉山		銅鋳						50
駿河9	敬満神社		銅鋳	◇陶筒×7					49
遠江1	島			東遠円筒	蓋付				53
遠江2	白山神社1	保延		土師筒				1135～41年	50
	白山神社2			陶筒	蓋付				
遠江3	比丘尼4			東遠円筒	山茶碗	有			54
				東遠円筒	山茶碗	〃			
	比丘尼6			東遠円筒		有			
	比丘尼7			土師筒		有			
	比丘尼 号不明			東遠円筒×3					
遠江4	小国神社	1168	二段盛蓋式	土師筒	蓋付				54
			銅鋳大型					口径18.0cm	
			銅板						
				渥美壷	山茶碗				
				常滑甕	渥美片口鉢				
遠江5	石室寺	1126	一段笠蓋式	◇渥美壷					55
遠江6	塔之壇		一段盛蓋式×7	◇渥美短頸壷					56
遠江7	勝栗	1146		湖西円筒	蓋付				55
遠江8	天白磐座			渥美円筒多数					57
遠江9	行者岩			渥美円筒多数					58
三河1	鳳来山鏡岩下			渥美円筒多数					59
三河2	普門寺1	1156	平蓋式	渥美円筒	蓋付				
	普門寺2			渥美円筒	蓋付				
	普門寺撹乱	1156	平蓋式						
三河3	観音山	1197	銅板Bb類	渥美円筒	蓋付				60
尾張1	大御堂寺		一段盛蓋式	渥美円筒	蓋付				61
甲斐1	雲峰寺		一鋳平蓋式	◇常滑三筋壷×2		有（複数）			62
			銅板Bb類	◇渥美壷×2					
			鉄	◇陶短頸壷					
甲斐2	柏尾山2	1103	平蓋式	陶筒	蓋付	有	専用－有室		63
	柏尾山4			陶筒	蓋付	有			
	柏尾山6		銅板Ba類・二盛式			有	直納－有室		
			銅板Ba類・二盛式			〃			
甲斐3	大善寺		銅板Ba類・二盛式	陶筒	蓋付				30
甲斐4	一の森1			渥美円筒	蓋付	有			64
	一の森2			渥美円筒×6	蓋付×7	有			
甲斐5	善応寺			陶筒	蓋付	無			30
甲斐6	秋山	1197	一鋳式	◇常滑甕					65
		1197	銅鋳						
			銅板						
信濃1	鷲寺		銅板Ba類・一盛式	珠洲甕		有	転用－有室		66
信濃2	長谷	1151	金銅板Ba類・一笠式	常滑甕	倒立	無	転用－無室		67
信濃3	山堂		銅鋳						67
信濃4	矢作山			陶筒×2					67
信濃5	経ヶ峯	1172	一鋳式			有			67
信濃6	徒士山		銅鋳						67
信濃7	北日名	1157	一鋳平蓋式						67
信濃8	旧海岸寺奥の院		二段盛蓋式						68
信濃9	放光寺			石筒					67
信濃10	牛伏寺堂平		銅鋳						67
信濃11	下牧1		銅鋳						69

番号	経　塚	年号	経　筒	外 容 器	外容器蓋	石　室	埋 納 法	備　考	文献
	下牧 2		一鋳平蓋式						
飛騨 1	白王神社		銅板Ba類・二盛式						70
美濃 1	飯高		一鋳一盛式						70
美濃 2	桜堂 1			東海円筒	蓋付	有			71
				東海円筒	蓋付	〃			
	桜堂 2			東海円筒	蓋付	有			
美濃 3	酒波神社			陶筒	蓋付				72
				陶壷×2					
美濃 4	十二社神社	1178		陶筒	蓋付				73
美濃 5	養老神社		銅板A類	常滑甕		無	転用－無室		74
越後 1	里本庄		銅板Bb類	土師筒					75
				珠洲甕	珠洲片口鉢				
越後 2	大沢		一鋳一盛式	珠洲甕					76
越後 3	横峯 1			陶筒	蓋付	無			77
	横峯 2			陶片		無		経巻出土	
越後 4	菖蒲塚	1170	平蓋式	珠洲甕					78
				珠洲甕					
越後 5	青海神社	1178	二段盛蓋式						78
			二段盛蓋式						
			銅板Bb類						
				珠洲四耳壷					
越後 6	小栗山不動院裏山A			珠洲甕		無		経軸頭出土	79
越後 7	円融寺		銅鋳	銅板					80
越後 8	上軽井川	1197	銅板Ba類・二盛式	珠洲甕	珠洲片口鉢	有	転用－有室		81
		1197	銅板Ba類・二盛式	〃	〃				
越後 9	三諦寺	1203	銅板Ba類・二笠式	珠洲壷					82
越後10	大御堂		銅鋳	珠洲四耳壷					83
越後11	シラミ		銅板Bb類	◇珠洲甕					84
越後12	法定寺		銅板Bb類	甕					84
越後13	関山神社		一段盛蓋式	珠洲甕	◇珠洲片口鉢×2				85
				珠洲甕×2					
越後14	天神山	1167		珠洲円筒		無			86
				珠洲甕×2		無			
越中 1	円念寺山 2－2			珠洲円筒	蓋付	有			87
	円念寺山 3	1186		珠洲円筒	蓋付	有			
	円念寺山 5				珠洲円筒蓋	有			
	円念寺山13－1			珠洲円筒	蓋付	有			
越中 2	京ヶ峰	1167	銅板Ba類・一笠式	珠洲甕	珠洲片口鉢	有か			88
越中 3	白山		銅板Bb類	◇珠洲甕	珠洲片口鉢				89
越中 4	上向田 1			珠洲円筒	蓋付	有			90
越中 5	記塚		銅	◇珠洲甕	珠洲片口鉢				89
加賀 1	小坂 1 号墳		銅板Ba類・一盛式	珠洲甕	珠洲片口鉢	無	転用－無室		91
			銅板Ba類・一盛式	〃	〃				
加賀 2	長滝墓山C		一鋳平蓋式	珠洲甕	珠洲片口鉢	無	転用－無室		92
加賀 3	別山		一鋳式						93
越前 1	清滝	1176	銅鋳						34
越前 2	朝倉山		銅	甕					94
越前 3	下黒谷	1157	銅板Bb類	常滑甕		有	転用－有室		95
越前 4	金ヶ崎		平蓋式						95
越前 5	谷口		一段盛蓋式						96
			一段盛蓋式						
越前 6	大椋神社 1		銅	越前甕		有	転用－有室		97
	大椋神社 2		銅	越前甕	越前片口鉢	有	転用－有室		
若狭 1	丸山		一段盛蓋式	◇土師筒		有			98
若狭 2	田烏元山谷 1－2		一段盛蓋式	壷	鉢	有	転用－有室		99
	田烏元山谷 1－3		銅	東播甕		有	転用－有室		
	田烏元山谷 3			土師筒	蓋付	有			
	田烏元山谷 4		一段盛蓋式	壷		有	転用－有室		

表註

番号は図 6 に対応。経筒・外容器・外容器蓋は横の並びでセット関係を示すが、◇のつくものは関係不明である。以下の語は次のように用いる。 銅鋳：銅鋳製であるが行方不明・破損・分類できないもの，銅板：銅板製であるが行方不明・破損・分類できないもの，銅板Ｂａ類：後に模倣形式を記す，陶筒：陶製円筒容器，石筒：石製円筒容器，土師筒：土師質円筒容器，東遠円筒：東遠江産円筒容器，珠洲：珠洲系，蓋付：専用容器の蓋，〃：同一個体，倒立：蓋は用いず外容器を倒置，専用：専用外容器，転用：転用外容器

表対応文献

1　蔵田　蔵　1963「経塚論 2 」『MUSEUM』148

2　草間俊一　1965「岩手県和賀郡丹内山神社経塚」『日本考古学年報』13　昭和35年度

3　奈良国立博物館　1991『奈良国立博物館蔵品図版目録』考古篇 経塚遺物

4　藤沼邦彦　1975「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館研究紀要』1
5　宮城県教育委員会　1989「花山寺経塚群」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』
6　喜多方市教育委員会　1999『松野千光寺経塚』
7　会津坂下町教育委員会　1996『駒壇経塚発掘調査報告書』
8　三宅敏之　1970「古代郷土生活の歴史考古学―経塚を通じてみた福島県の場合」『郷土史研究講座』2　朝倉書店（一部改定の上「福島県の経塚」として三宅敏之1983『経塚論攷』雄山閣出版に再録）
9　東和町教育委員会　1979『木幡山蔵王経塚』
10　須賀川市教育委員会　1982『米山寺跡 史跡岩代米山寺経塚群発掘調査報告書』
11　『双葉町史』2　1984
12　いわき市教育委員会　1998『上ノ原経塚』
13　『男鹿市史』上　1995
14　奈良修介　1967「経塚」『秋田県の考古学』
15　奈良修介　1957「秋田の経塚」『考古学雑誌』42-4
16　遊佐町教育委員会　1993『遊佐町金俣経塚（木製経筒出土）調査報告書』
17　小野　忍　1977「酒田市大字北沢大平周辺の古代・中世遺跡」『庄内考古学』14
18　阿部正巳　1921「山形県飽海郡中野俣村経ヶ倉山の経筒」『考古学雑誌』11-8
19　佐藤禎宏　1980「最上川流域出土の珠洲系陶器」『庄内考古学』17
20　川崎利夫　2002「山形県の経塚とその特色」『歴史考古学』50
21　川崎利夫　1968「鶴岡市湯田川の経塚について」『庄内考古学』8
22　川崎利夫　1977「立川町狩川経塚について」『庄内考古学』14
23　川崎利夫　1991「山形県の埋，納経遺跡」『山形考古学』4-4
24　保角里志　1979「東根市薬師寺裏山経塚出土遺物について」『さあべい』2,3
25　川崎利夫　2002「東根市大森山の経塚と出土遺物」『さあべい』19
26　奈良国立博物館　1998『東北・越後地方に埋納されたやきもの』特別陳列 経塚出土陶磁展4図録
27　小野　忍　1977「寒河江市高瀬山出土の中世陶器」『庄内考古学』14
28　白鷹町教育委員会　1988『笠松山遺跡発掘調査報告書』
29　白鷹町教育委員会　1994『称名寺裏遺跡発掘調査報告書』
30　東京国立博物館　1988『経塚－関東とその周辺』
31　阿久津久　1985「門毛経塚遺物と中世陶器」『茨城県立歴史館報』12
32　和田千吉　1902「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」『考古界』4-5,6
33　橋場君男　1995「雷電山古墳墳頂出土の経塚遺物について(上)」『玉里村立資料館報』1
34　関　秀夫　1985『経塚遺文』東京堂出版
35　武田宗久　1957「千葉県千葉市千葉寺址」『日本考古学年報』5
36　日光二荒山神社　1963『日光男体山－山頂遺跡発掘調査報告書』
37　三宅敏之　1979「栃木県と経塚」『栃木県史』史料編考古2しおり（「栃木県の経塚」として三宅敏之1983『経塚論攷』雄山閣出版に再録）
38　唐澤至朗　1998「群馬の経塚」『群馬県立歴史博物館紀要』19
39　林　宏一　1975「藤原守道の経筒」『埼玉県立博物館紀要』1
40　野沢　均　2001「利仁神社経塚の造営意義について」『あらかわ』4
41　野沢　均　1999「埼玉の経塚」『考古学論究』6
42　野沢　均　1999「薬師堂山経塚造営の背景(予察)」『朝霞市博物館研究紀要』2
43　(財)東京都埋蔵文化財センター　1987「No.513遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』昭和60年度（第4分冊）
44　奈良国立博物館　1997『関東・北陸に埋納されたやきもの』特別陳列 経塚出土陶磁展3図録
45　館町龍見寺地区試掘調査団　1997『館町龍見寺経塚』
46　鎌倉市教育委員会　2001『国指定史跡永福寺跡 遺構編』
47　冨永樹之　2002「神奈川の経塚」『神奈川考古』38
48　安藤孝一　1981「伊豆山神社境内の経塚」『三浦古文化』30
49　『静岡県史』3　1936
50　『静岡県史』資料編3　1992
51　『沼津市史』資料編考古 2002
52　佐野武勇「富士山頂上三島ヶ嶽の経塚」『考古学雑誌』20-10
53　菊川町教育委員会　2000『静岡県指定史跡横地城跡総合調査報告書 資料編』
54　『森町史』資料編1考古　1998
55　奈良国立博物館　1996『中部地方に埋納されたやきもの』特別陳列 経塚出土陶磁展2図録

56 『磐田市史』史料編1　1992
57 引佐町教育委員会　1992『天白磐座遺跡』
58 『引佐町史』上　1991
59 江崎　武　1976「鳳来寺山出土の中世陶器」『東洋陶磁』3
60 柴垣勇夫　1982「建久8年書写法華経伴出の経塚出土資料」『愛知県陶磁資料館研究紀要』1
61 宮川禎一氏の御教示による
62 『塩山市史』史料編1　1996
63 奈良国立博物館　1977『経塚遺宝』
64 田代　孝　1986「一の森経塚発掘調査報告」『甲府市史研究』3
65 山梨県立考古博物館1993『山梨の経塚』第11回特別展図録
66 『長野県上水内郡誌』歴史篇　1976
67 森嶋　稔1981「信濃の経塚資料にみる二，三の課題」『信濃』33-12
68 上田市立信濃国分寺資料館　1990『古代の寺院』企画展図録
69 林茂樹編　1966『上伊那の考古学的調査』総括篇
70 蔵田　蔵　1964「経塚論6」『ＭＵＳＥＵＭ』159
71 林　魁一　1916「美濃国土岐郡土岐村桜堂経塚発見物」『考古学雑誌』7-1
72 林　魁一　1932「美濃国土岐郡日吉村経塚及び発見遺物」『考古学雑誌』22-9
73 渡辺博人　1998「文治三年(1178)紀年銘陶製経筒について」『美濃加茂市文化財調査集録』3
74 三宅敏之　1971「養老神社境内発見の経塚遺物」『ＭＵＳＥＵＭ』239
75 『神林村史』通史編　1985
76 『新発田市史』上　1980
77 安田町教育委員会　1979『横峯経塚群』
78 保坂三郎　1971「越後菖蒲塚古墳経塚出土品」『経塚論考』中央公論美術出版
79 見附市教育委員会　1977『小栗山不動院裏山経塚群』
80 松谷時太郎　1958「越後の経塚」『越佐研究』13
81 金子拓男　1965「新潟県柏崎市上軽井川の経塚」『越佐研究』22
82 金子拓男　1987「三諦寺経塚遺跡」『考古資料（図・拓本・説明)』柏崎市史資料集考古篇1
83 吉岡康暢　1985「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『石川県立郷土資料館紀要』14
84 伊藤啓雄　1998「新潟県における経塚研究の現状と課題」『柏崎市立博物館館報』12
85 小島正巳・時枝務　2002「関山神社経塚の基礎的研究」『妙高火山研究所年報』10
86 金子拓男　1975「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1
87 上市町教育委員会　2002『黒川上山古墓群発掘調査第7次調査概報 円念寺山遺跡』
88 石田茂作　1957「越中日石寺裏山経塚」『考古学雑誌』42-4
89 『富山県史』考古編　1972
90 『福岡町史』 1969
91 吉岡康暢　1970「金沢市小坂第1号墳の調査」『石川考古学研究会々誌』13
92 (財)石川県埋蔵文化財センター　1999『能美丘陵東遺跡群Ⅳ』
93 國學院大學白山山頂学術調査団「白山山頂学術調査報告」『國學院大學考古学資料館紀要』4
94 『福井市史』史料編1考古 1990
95 福井県立博物館　1986『古鏡の美』第5回特別展図録
96 梅原末治　1916「続越前敦賀郡の遺物と遺蹟」『考古学雑誌』7-1
97 川村俊彦　2000「大椋神社経塚」『第15回発掘調査報告会資料－平成11年度に福井県で発掘調査された遺跡の報告－』
98 『高浜町誌』 1985
99 御嶽貞義　2000「田烏元山谷遺跡」『第15回発掘調査報告会資料－平成11年度に福井県で発掘調査された遺跡の報告－』

（国立歴史民俗博物館考古研究部）

（2003年2月28日受理，2003年5月9日審査終了）

Bulletin on National Museum of Japanese History
vol.108 October 2003

The Regional Characteristics of the Sutra Mounds of Eastern Japan

MURAKI, Jiro

Sutra mounds were built in all areas of Japan during the 12th and 13th centuries. Because the Kinki district around Heian-kyo and northern Kyushu around Dazaifu are the two main areas where these mounds are found, research to date has tended to concentrate on the sutra mounds of western Japan. However, there has been an increase in cases of excavations of sutra mounds in eastern Japan over the past several years. This paper examines regional trends among sutra mounds in eastern Japan by focusing on sutra mounds from which bronze sutra cases, specially-made ceramic and stone sutra cases and outer cases have been excavated. The propensity of sutra mounds to be ruins with strong regional flavors means that when making a detailed examination of individual materials their specificity will inevitably come to the fore. Consequently, by taking a broad overview in order to draw a general outline of the sutra mounds of eastern Japan, the aim of this paper is to undertake a fundamental examination that will lead to future research.

This will be achieved by firstly classifying bronze sutra cases into those which are of the Kinki style and those made using a different manufacturing technique where the body and the bottom of the sutra case are cast together, and pinning down areas of distribution for these two types. Next, the outer cases are classified according to whether they are Suzu, Tokai or stone cases, etc. and their distribution will be similarly investigated. When sutra cases are buried they can be buried either using outer cases or by making stone chambers. Since there has been an increase in instances where details of excavation have been made known, classification will also be made on the basis of burying methods that have come to light through this kind of information. Differences between the Japan Sea side and the Pacific Ocean side and features unique to the Kanto region, clearly emerge in the course of these investigations. These have made it possible to classify the sutra mounds of eastern Japan into seven different regions: Mutsu, Dewa, Kanto, Chubu highlands and eastern Shizuoka, western Tokai, Kaetsu and Reinan.